

父母の根元は天地の令命に在り、身体の根元は父母の生育に在りと続いていくもので、一つ一つのもので当たり前と思ってしまうばそれまでだけれども、もう一度原点に戻ってみる、全てには必ずルーツがある、あるいは根っこがある、根っこをもう一回掘ってみましょうということです。「報徳訓」は二つに分けることができます。一つ目のパートはここ（最後の一行以外の部分）になり、もう一度心の眼を開いて様々なものの根っこと繋がりますようにいうことです。一つ一つのものがなぜあったのか、田んぼって当たり前にあるんだけど原野を誰かが切り開いたもの、ここにいる自分は誰かが育ててくれたというふうに心の眼を開かないと見えてこないもの、それを徳と呼びました。金次郎は徳を良いところという意味で使ったわけではなく、良いか悪いかは見え方次第で、今ここに存在していること、それがすごく大事なことでとやうんです。心の眼を開くこと、「心田を耕すこと」だと言います。「心田の耕し」があつてこそ生まれるのが、第二パートである最後の一文ということになります。彼にとって最も大事だったパートはこの一文、「年々歳々報徳を忘るべからず」というところでした。一体どういうことか、私たちがここまで来るのにたくさんの人

たちと繋がってきた、そういう根っこと繋がれた時にこそ、立ち上がり自分自身に何ができるか、そのことを考えよう、自分にはどんな恩返しができるのか、報徳というのは受けた徳に報いようとする、受けた徳に恩返しをしよう、自分なりにどう行動できるかを考えようと思は呼びかけたわけです。自分のためじゃないからこそ、底力を、あるいは自分自身が懸命になれる、その大きな力を手に入れることができる。この一言に凝縮されているということです。

報徳訓に書かれている「心田の耕しを田畑の力に変える」という構造が昨今では道徳と経済の繋がりが方なっているふうにも言われたりします。まずは心を耕すこと、心を豊かにすること、根を太くすること、そのことが町の力を、そして具体的な行動を強くしていく、そんなことではないかなあと思ふわけです。

金次郎自身はやはり一人ひとりの行動というもの、そのことが力強く生まれること、そのことが大事だと考えたわけです。金次郎一人が頑張つて六百もの村が豊かになるわけはありません。町の一人ひとりが、あるいは村の一人ひとりが立ち上がることで、そのことから生まれていくものだったと。そんなまきに報徳、それはいわゆる恩送りの構造になっているというふうにも言われていた

りします。いわば恩返しというのはよくあるやり方ですが、根っこは過去からもらつてきたものを未来へと生かしていくこと、親からもらったものを子どもたち孫たちへと向けること、先輩からもらったものを後輩へと向けること、まさにしっかりとバトンを渡していくこと、そうやって未来創造やまちづくりをしてきたのがこの国の国づくりの在り方なのではないかなあと思います。

結びになりますが、皆様こんなことをお考えいただきたいと思ひます。この字（生）をご覧になった時にいろんな読み方があると思うんですが、読み方、大体何通りぐらいあるか想像できるでしょうか。なんと、百五十種類以上の読み方があるそうです。何が言いたいのかという人間生き方、あるいは一人ひとりの価値観、それは実に多様であるということを意味しようとしているのではないかという方があるんです。ところがこの字（死）はいったい何通りの読み方があるかということ、実はこちらの字は一通りの読み方しかありません。「し」という読み方です。このことから日本人のある種の価値観が見えるのではないのでしょうか。誰でも必ず死を迎えるけれども、そこに至るまでの生き方、それは実にカラフルで多様なものである。一人ひとりが一体何を幸せと考え、ど

んな根っこと繋がつて、自分がどんな花を咲かせていこうとするのか、それは様々でありうるのだということとを金次郎のこの姿、常に一歩前へとそのことを大事にしていたあの足が象徴している。しかしその答えは一通りではなく多くの道があり多くの答えがある。その答えを導くためにも自分自身の何気ない日常、当たり前のような光景、そのことにも一度向き合つてみることで、そこで心の眼を開き、気づき、根との繋がりが、そこから自分自身の行動へと出ていく、そこで生まれるのが豊かさ、そんなものなのかもしれないというふうに思つたりします。このような皆様とのご縁をいただきましたこと、そしてまた藤樹先生とのご縁があるこの地、また二宮家とも大変ゆかりの深いこの地で一時をいただいたことにあらためて感謝を皆様おひとりおひとりの日常がよりカラフルで力強い希望に満ちたものになりますようにとその願いを込めて、お話を終わらせていただこうと思ひます。長時間にわたりご清聴いただきましたこと、ありがとうございます。

本年三月二十一日に開催しました「中江藤樹心のセミナー」で、中桐万里子先生にご講演いただきました。その講演内容を刈田豊朗副会長によって文章化されたものです。